

### 5.13 言葉を得る

現今、当事者性の自覚を求めて「誰にもあること」という言い方が人口に膾炙しているように見える。老いは誰にもやってくる、だから高齢者福祉は誰にとってもわがことなのだ、といったように。手早く関心を調達するには好適な論理だろう。けれど、この言い方は共通ならざる経験に対する関心をそいでしまいかねない。そうではなくて、当事者性とは、あなたに起こったことが私には起こっていないし起こりそうにない、私に起こったことがあなたには起こっていないし起こりそうにない、そういう時に問われるものであろう。日常的にはカードゲームやすごろくの経験を思い返してみればわかるように、あなたが私だったかもしれないし、私があなただったかもしれない。完璧な人間はどこにもいないわけだから、皆がなんらか課題の当事者であり得るはずだが、それを忘却しているだけかもしれない。当事者性とは、そのことに発する被刺激性のことではなかろうか。

本書に対する応答が、だから、「色覚問題について理解を深めました」でなくても構わない。別の問題でも「こんな人の話が自分には興味深く思えるようになった」といったことがあれば、一つの応答だろう。

目は見物人だが耳は参加者だ、とデューイは述べた。彼のいう参加は、日常は無頓着が支配しているのでたまには学習や行動に「参加」しなさい、といったものではないだろう。もちろん、そういう参加も無駄というわけではないだろうけれども、それがより積極的に生きてくるのは、日々の暮らしが多少なりとも参加であるような態度が非日常レベルの学習活動を生みだし、その学習の機会が日常の耳をいっそう敏感にする、といった正の循環をつくりあげて初めてではないだろうか。

耳を持つとすることは、確かに、陽だまりの日常性に寒風を入れることになるかもしれない。にもかかわらず刺激されるのは、フランクが言うとおりに「他者の声を聴くことによって私たちは自らの声を聴く」から、だろう (Frank 1995: 25=2002: 47)。この場合の「聴く listen for」は、すでにある声に耳を傾けることではなく、まだない声を探して耳を澄ませることを言う。つまり、「聴くことは困難な作業」なのだが、ときに引きつけられるように聴きたくなることがあるのは、他者の声を聞こうとすることで自分の耳が変わり、それとの応答関係において自分の声が言葉を得はじめるから、であるにちがいない。相互行為論の用語でいえば、新たな「自己との相互行為」が始まるのである。